

米国クオリティ株の成長に乗って長期投資

ポイント① 米国クオリティ指数の高いパフォーマンス

米国株式市場のスタイル別指数には、前回ご紹介したバリュー指数やグロス指数の他に、クオリティ指数という指数があります。クオリティ指数とは、良質な資産を持ち、債務が少なく、安定したビジネスモデルを有する企業群の指数で、バリュー指数やグロス指数のように株価の割安度ではなく、企業そのものの評価に基づいて銘柄を選んだスタイル指数です。

1980年12月から2018年7月までのパフォーマンス（トータルリターン・ベース）を見ると、グロス指数が43倍、バリュー指数が61倍であったのに対し、クオリティ指数は86倍という高いパフォーマンスでした。ちなみに、総合指数はバリュー指数とグロス指数の間の55倍でした。（図1参照）

ポイント② クオリティ指数は大勝ちする局面あり

クオリティ指数のパフォーマンスをもう少し詳しく見てみましょう。クオリティ指数と総合指数の3年パフォーマンスを比べてみると、クオリティ指数は総合指数に対して、パフォーマンスが優位な局面で大勝ちし、パフォーマンスが劣位の局面では相対的に負けが小さいことがわかります。しかも、クオリティ指数が優位な局面が全体の67%を占めました。（図2参照）

バリュー指数とグロス指数の比較の時のように、割安/割高で構成比率を決める指数ですと、基本的には優劣が交互に繰り返され、特別なシーンを除けば優劣の大きさは似たり寄ったりの傾向が出がちですが、クオリティ指数のように企業の評価で銘柄を選び、成長企業をしっかりと選ぶことができれば、長期的には「大きく勝って、小さく負ける」というパフォーマンスが残せるのだと考えられます。

ポイント③ 景気動向とも関係が小さい

クオリティ指数のパフォーマンスと米国景気を比べてみても、さほど明確な関連性は見られません。2度の景気後退局面を見てみると、インターネットバブル崩壊後のパフォーマンスは、クオリティ指数と総合指数には大きな格差は生じませんでした。リーマンショック後は優位なパフォーマンスが出ていました。（図3参照）

以上のように、クオリティ指数のパフォーマンスの優劣は、局面ごとに明確な判断ができない一方、長期的には非常に優位なパフォーマンスを残しています。企業のクオリティに着目して株式に投資することで変化する投資環境に振り回されることなく、中長期での企業の成長の果実を享受しやすくなると言えそうです。

図1：米国株のクオリティ指数の推移

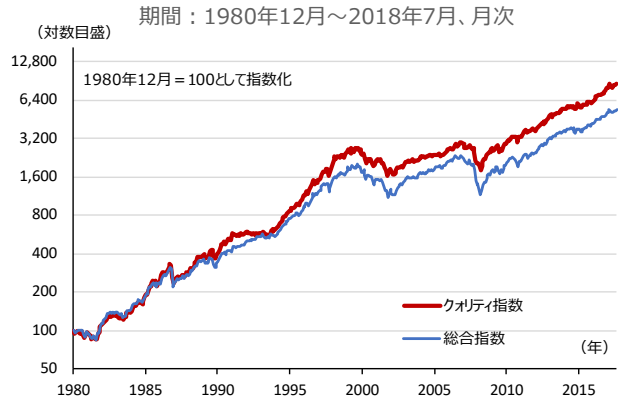
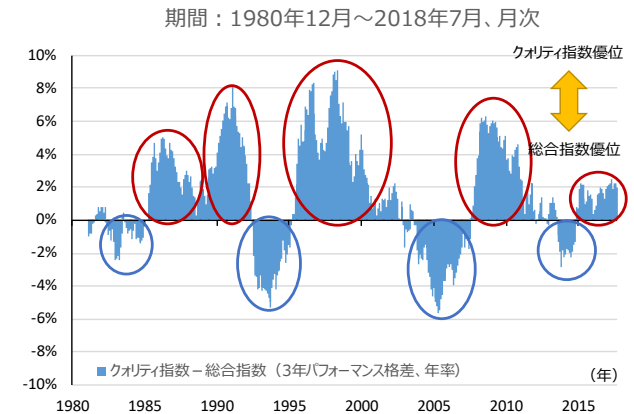


図2：米国株のクオリティ指数の3年パフォーマンス

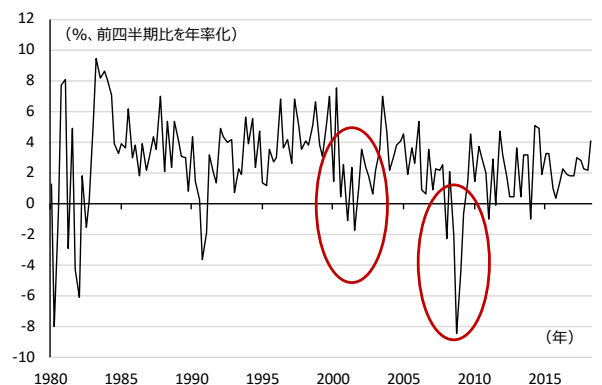


(注)クオリティ指数はMSCI USA Gross Total Return Index、総合指数はRussell1000 Gross Total Return Index

(出所)Bloombergデータより野村アセットマネジメント作成

図3：米国GDP（国内総生産）成長率指数の推移

期間：1980年第1四半期～2018年第2四半期、四半期



(出所)Bloombergデータより野村アセットマネジメント作成

当資料は、投資環境に関する参考情報の提供を目的として野村アセットマネジメントが作成したご参考資料です。投資勧誘を目的とした資料ではありません。当資料は市場全般の推奨や証券市場等の動向の上昇または下落を示唆するものではありません。当資料は信頼できると考えられる情報に基づいて作成しておりますが、情報の正確性、完全性を保証するものではありません。当資料に示された意見等は、当資料作成日現在の当社の見解であり、事前の連絡なしに変更される事があります。なお、当資料中のいかなる内容も将来の投資収益を示唆しない保証するものではありません。投資に関する決定は、お客様ご自身でご判断なさるようお願いいたします。投資信託のお申込みにあたっては、販売会社よりお渡します投資信託説明書（交付目論見書）の内容を必ずご確認のうえ、ご自身でご判断ください。